幼児と團体生活

山下俊郎

四月に新しく入園した子ども達も、五月という月に入ると園の団体生活にだいぶなれて来てはいる筈である。しかし、その団体生活はまだほんとの軌道に乗つているとはいえまい。子ども達の間には、団体生活に対する心の動きについて可なりの個人差がいちじるしい、そして、全部の子どもが同じように歩調をそろえてという工合には行つていないからである。そこで幼児と団体生活について一通りのことを見てみたいと思う。

一　子ども達の生活背景を考えること

新しく園の生活に入つて来た子ども達の背景には、それぞれの家庭がある。一軒一軒の家庭は、それぞれ相異る生活の仕方をしている。ほとんど投げやりで子どもの生活に対して何の教育的な配慮もなして野育ちのようにして大きくなつてきた子どももいる。また、一つ一つの事情について、あれはああ、これはこうと一々こまかに気をつかつている極度に神経質な育てられ方で大きくなつてきた子どももいる。子どものすることなすことに一々大人の物差しをあてはめて事細かに干渉されながら大きくなつてきた子どももいる。子どもの気持ちをよくよく汲んでやつて、子どもの心がまつすぐにのびられるような育てられ方で育つてきた子どももいる。子どもの育て方、教育の仕方はそれぞれの家庭でそれぞれちがつている。また、子どもの教育だけでなく、人生というものに対する考え方、世の中というものに対する考え方、道徳に対する感じ方、宗教に対する態度などでもそれぞれの家庭はみんなそれぞれにちがつているのである。

このようにいろいろの生活の背景のちがう子どもが、みんな一応はそれぞれの生活の背景を背負いながら、しかも園という一つの共同生活の団体の中に入り込んでくるのである。いままではお家でやかましくいわれていたことが園では何ともいわれないで思う存分にできるという子どももあろう。またお家では何ともいわれなかつたのに、園ではいけませんといわれることもあろう。園の生活は子どもにとつての新しい世界の発見である。この新しい発見は、子どもにとつてのいろいろの問題を提供する。

入園、入学当初いつでも問題になることの一つに、言葉が悪くなつた。お行儀が悪くなつたといわれる問題がある。いままではちやんとした言葉を使つていたのに、園から品の悪い言葉を覚えてきたと、よくお母さん達が訴える。これは子どもが新しく発見したことに対する興味である。新しい共同生活の中で、自分のお家とちがう標準の中で生活してきたお友達の持ち物に対する一つの興味が、こういつたことをさせる。ある生活からある生活へと移つて行くときに必然的に現われてくる一つの現象だといつていい。（序にいつておくとこういつたことは、大さわぎしないで放つておくに限る。子どもは自分のやること、自分のいうことに対する反応を楽しんでいるのである。まわりの者が何も反応しないでいないと興味がなくなるから、やめてしまうのである。）

園の団体生活は、子どもにとつての新しい生活である。そこにはいままで子どもの生活してきた家庭とはいろいろの面でちがう生活の原理が支配している。この生活の原理に子どもをなじませて行くことが入園当初の園のつとめである。しかも、この新しい生活になじませながらも、園の生活が楽しい生活であり、子どもにとつて安定感のゆたかな生活の場所にならなければならないのである。このように園の生活になれるということは、たくまずして自然にいつのまにか流れ込んで行くことが実際には行われてきているといつていいであろう。しかし、その場合に一番大切なことは、いままでいろいろと述べてきたような子どもがこれまでに生活してきた生活の背景について十分に思いを致すことであろう。子どもが団体生活の中でいろいろと現わす行動の特徴はこのことによつて理解のかぎが得られるであろう。そして、このことをさらに徹底させようと思つたら、家庭との十分の連絡をとり、家庭の十分の協力を求めることが必要であろう。

めいめいの子どもの生活の背景を考えること、これが子どもと団体生活の問題を考えるのにまずなすべきことであろう。

二　団体生活への入り方

団体生活の問題には、一つの生活協同体としての園の規律ある生活に入るという問題と、単に集団生活に入るという問題との二つがある。いま左に考えてきたのは、この前の方の

問題に焦点をあわせて考えてみたのである。もう一つの集団生活に入り、これになじんで行くという問題について今度は考えてみよう。

小さい幼児の場合は、ほかの子ども達と一緒になつて行動し、遊び、生活するということに、おのずから成長の段階がある。この段階については、今年の一月号の本誌に「幼児とともだち」という題で書いておいたから、詳しくは一月号を参照して頂きたい。

その際にも述べたように、子どもが集団生活に入つて行くのには、独り遊び→傍観→並行遊び→集団遊び（連合的遊び）→組織的遊びという道順をとつて成長する。そしてふつうの場合、三―四才以上になると、独り遊びや傍観といつたような段階はきわめて少ない。しかし、このようないわゆる社会的行動の発達においては、子どもの間の個人差がきわめていちじるしいものがある。したがつて、大部分の子どもは、入園して来てしばらくたつとおともだちとの集団生活の中へさつさと入り込んで行くことができるのではあるが、中にはそうまく行かない子どももいる。独り遊びばかりしている子どももある、傍観状態に在る子どももいるのである。

このような子どもは、多くの場合にいままでの家庭生活の中で、まわりの子ども達との接触があんまりないままに育つて来た子どもである。祖母さん子、一人つ子、末つ子、異性のきょうだいばかりの中で育つた子どもなどがそうである。したがつて、このような子どもの場合には、まずその子どもの育つた背景としての家庭を理解することが必要なのである。そしてこのような事どもの現在現わしている行動をどうやつてほかの子どもなみにしてやれるかどうかを考えてやる必要がある。

このような子どもは、わたくし達が一口に非社交的な子どもといつている子どもであるが、団体生活に入れない子どもとして教師や保母にも親にも誠に扱いにこまる子どもである。こういつた子どものことを次に考えてみよう。

三　集団生活に入れない子ども

わたくし達は毎年四月から五月にかけて、必ず集団生活に入れない子どもの問題について相談を持ちかけられる。

こういう子どもは、幼稚園や保育所に行くのが嫌いかというと、けつして嫌いではない。園には行きたくて行きたくてたまらないのである。しかし、いよいよお家を出かけるときにはいやになつてしまうのである。そして毎朝々々出かけるときは一さわぎである。あるいは、幼稚園の門の所まではお母さんと一緒にうれしそうにやつてくる、しかし門の所までくるとお母さんにしがみついてしまつてはなれない。また、ある子どもは、幼稚園に来た自分のお部屋の入口までは来るが、中に入らない。あるいは中に入つてもお母さんの姿がみえなくなると、泣きだしてしまう。このようにいろいろの程

度のちがう現われ方があるが、要するに園という一つの集団生活の中に中々入れないのである。

このようなたちの子どもは、さきに述べたことで分るように一人子や末つ子、祖母さん子といつた種類の子どもに多いのが普通である。そして、こういつた子どもこそ集団生活の中に入れてやらなければならない子どもである。そこでこの子ども達を集団生活の中にうまく導き入れて楽しい園の生活をさせるようにするにはどうしたらいいかを次に考えてみよう。

わたくし達はさきに、子どもの生活の背景を考えることが大切だといつた。このことはこのような子どもの場合にも、そしてこの場合には何よりも大切なことである。こういつた子ども達は、いままでの育つて来た様子からいつて、ほかの子ども達とあんまり交渉のなかつた子ども達である。だから子どもの集団に入れないのである。そして、これを裏からいえば、この子ども達はいままで大人や年上のひとばかりを相手にして暮してきた子ども達である。このことが考え方の出発点である。一足飛びに子どもの集団に子どもをつつ込もうとしても駄目である。家庭の中で子どもを相手にしていた大人であるお母さんや祖母さんの手から、家庭の外の園の生活の中での大人である先生の手へ、徐々に子どもを受け渡すことが第一段の仕事なのである。このためには子どもとお母さん（あるいは祖母さん）というグループに先生に加わつてもらうのである。三人が一緒に行動するという機会をできるだけたくさん作るのである。毎朝、先生に迎えに来ていただいて、お母さんも一緒に園へ出かける、という生活をつづけるそうするとしばらくたつと子どもは先生にすつかりなれてしまう。そのなれが完全にできあがればお母さんが離れても平気になつてくるのである。わたくしは、こういつたタイプの子どもについて受けた相談の中で、わたくしの所へ相談にくるために、子どもとお母さんとそして先生という三人で、電車に乗つてよその知らない男の先生の所に行つて、小半日も先生と一緒に同じ行動をとつた、というただ一回だけの経験が、この先生とのなじみの感じを濃く作つたので、いままで絶対に口をきかなかつたその子が翌日から先生の傍へよつてくるようになり、間もなく口を利くようになつたという例を一つ持つている。またある農村の小学校の先生は、このようなタイプの一年生の子どもを、毎日迎えに行つては自転車の後にのせて無言で通うことを半年続け、ある日後をふり向いて「どうだ面白いか」と話しかけた所、それから口を利くようになつたという経験を持つている。

園児の場合にははじめは母親と子どもと先生というグループで先生との親しみをまし、親しみができたら母親がぬけるということで大抵の場合はうまく行くのである。

そして、先生とすつかりなじみができてくると、第一段階は完全にできたわけである。園へ行つても、たとえほかのお

友達とは一緒になれなくても、先生という一つの拠り所ができたのである。子どもには落ちつきが出てくるわけである。

このようにして第一段階ができたら、今度はいよいよ他の子ども達との共同生活への橋渡しを先生がつとめる。元来、子どもの集団というのは、遊びあるいは遊具を媒介としてできるかそれでなければ大人がつなぎになつてできるのが自然の姿なのである。先生となじみのできている子どもは、先生という道を通じてほかの子どもと結びつくよりほかに道はないのである。そこで先生は、比較的おとなしい子どもを選んで、先生も一緒になつて、子どもの仲間を作つてやる。そして一緒になつて遊び、一緒になつて行動するようにしてやるのである。この生活をしばらく続けて行けば、今後は先生がぬけても差支えなくなる。そして、今度は放つておいてもほかの子ども達と仲間になり共同生活をどんどん進めて行けるようになるのである。

ただし、ここまでの道行きはまことにゆつくりと遅々としたもので少しずつ少しずつの進歩である。あせると必ず失敗する。気永にやることが何よりも必要なのである。

"キンダーブツクまつり"

日頃弊社にお寄せ下さる御厚情に感謝し、喜びと、お礼の心をこめたキンダーブツク祭りをこのたび左の通り催します。

日時 五月三日（日）午後一時より四時まで

会場 共立講堂

催物

一、藤城清治先生指導 ギニヨール人形劇 **木馬座公演**

ピロー作「赤ずきんさん」—三幕—

二、NHK歌のおばさん **安西愛子先生** 独唱

三、**振付舞踊** 則武昭彦先生 指導
翠川淳先生 指導
賀来琢磨先生 指導

四、**幻燈スライド（天然色）** シンデレラ姫

五、**色彩漫画映画** ワーナーブラザース、メトロ、その他
各社の傑作漫画四巻

★キンダーブツクの歌 発表
サトーハチロー先生作詞
芥川也寸志先生作曲
指導 安西愛子先生

株式会社 **フレーベル館**
キンダーブックまつり企画部